

“Welcome to historians’ world”

——アイルランド留学体験記——

八谷 舞

2012年の5月にトリニティ・カレッジ・ダブリン(Trinity College Dublin)¹での留学を開始して、満4年になろうとしています。2016年9月には博士論文を提出する予定ですが、いよいよ留学も終わりに近づいた今、留学体験記の執筆という形で、この4年を回顧する機会を得ました。楽しいことも苦しいこともたくさんあった留学生生活を振り返ると、みなさまにお伝えしたいことは尽きないのですが、その中から特にお伝えしたい点を3点(留学準備、研究、研究以外の生活)厳選して記述してみようと思います。

1. 留学準備

私は諸先輩方と同じく、日本の学年でいう博士課程3年目の夏(私にとっては2012年9月)から正式に博士課程学生として現地大学に入学することを目標に、準備を始めました。当初は奨学金の支給期間が最長3年であることを考え、3年で博士論文を執筆して帰国する計画でした。しかし、概して留学は長引きがちですし、また延長となった場合には経済的な負担も大きくなるであろうことなどを勧告すると、当時採用されていた日本学術振興会特別研究員の指導委託制度²を利用して、できるだけ早めに現地にわたって研究を開始するのがいいのではないかと思うようになりました。たとえば1年間指導委託制度を利用すれば、奨学金支給期間の3年と合わせて4年は経済的な不安なく滞在することが可能になると考えたからです。したがって、渡航時期の目標は2011年の夏に決めました。

留学準備は、①受け入れてくれる大学／機関と指導教官を確保すること②語学試験の準備③奨学金の確保の3点に大きく分けられます。まず①について、私は当初オクスフォード大学を留学先に希望していたため、2010年の9月に短期間渡英し、そこで指導教官に希望していた教授に面会したのですが、私の拙い英語では満足に研究テーマを伝えられなかったばかりか、教授ともなんとなくそりが合わず、オクスフォードは断念することとなりました。続いて留学先の候補に考えたのはユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリン(University College Dublin)の歴史学部で、こちらで指導教官に考えていた先生とはEメールで連絡を取っていたのですが、途中から全く返信がなくなってしまいました。この時点ですでに予定の2011年夏は過ぎてしまい、途方に暮れた私は、既にトリニティに留学していた旧知の先輩である雪村加世子さん³に相談しました。雪村さんをご自身の面談の際、私のことを指導教官であるデイヴィッド・ディクソン教授(Dr. David Dickson)⁴に相談してくださいましたが、そのときディクソン先生が提案なさったのが、私の現在の指導教官の1

¹ 以下「トリニティ」と略称。

² 日本学術振興会では特別研究員に対し、上限となる期間を超えない条件での海外渡航および研究が認められている。詳しくはhttps://www.jsps.go.jp/j-pd/data/tebiki/h28_tebiki.pdfの13-14頁を参照。筆者の場合はDC1であったので、上限となる期間は採用期間3年間の1/2となる1年半。

³ <http://researchmap.jp/k-yukimura/> [accessed 13/04/2016]

⁴ <https://www.tcd.ie/history/staff/ddickson.php> [accessed 13/04/2016]

人であるキアラン・オニール先生(Dr. Ciaran O'Neill)⁵です。ディクソン先生は先輩から私の話を聞いて、すぐにオニール先生の研究室を訪ねて私の受け入れを打診してくださいました。それから何度かオニール先生とやりとりを重ねた結果、最終的に、ディクソン先生とオニール先生が共同で私の指導を引き受けてくださることに決定しました。指導教官の確保に苦慮する例は後にも先にも枚挙にいとまがありませんが、どこに縁があるかわかりません。先生方は、名前も知らないアジアの学生からメールを受け取っても返信なさないことが多いので、必ずしも正攻法のアプローチでうまくいくとは限りませんし、良い研究者が良い教育者であるとも限らないので、文献を読んで憧れた先生に指導を依頼したらご多忙すぎてなかなか指導が受けられない、などといった例もよく聞きます。留学準備中の方は、持てる限りのつてをたどるつもりで、視野を広くして指導教官を探す方がよい結果を得られるかもしれません。

留学準備の②と③について、まず語学試験については、イギリスとアイルランドでは一般的に TOEFL よりも IELTS が多く判定基準として用いられます。大学院レベルでは通常 7.0~7.5 程度のスコアが必要とされますが、トリニティでは総合得点で 6.5 以上が基準とされていたため、こちらは比較的容易に突破することができました。さらに奨学金に関しては、少しでも長い期間がカバーされる方がよいと考え、日本学生支援機構(JASSO)の海外留学支援制度(長期派遣型)⁶というプログラムに応募しました。奨学生としての採用通知を受け取ったのが 2012 年の 3 月で、さらに 2012 年 5 月初旬にはトリニティから入学許可を受け取り、ようやく留学準備が整いました。

アイルランドは渡航の前にビザを取得することが必要とされていないので、他の国に留学する場合よりも留学準備がかなり楽な部類だとは思いますが、それでも上記の通りで、留学準備には全部で 1 年ほど要しました。留学の期日が迫っているのに、奨学金が確保できなかったり語学試験のスコアが足りなかったりすると精神的に追い詰められてしまいますので、みなさまには、とにかく早めに留学準備に着手なさることをおすすめしたいと思います。また、私は実現することができませんでしたが、日本にいる間に修士までの研究成果を投稿論文などの形に残しておくことも、併せておすすめします。詳しくは後述しますが、留学したのちにテーマが大きく変わる例も少なくないからです。

2. 研究

留学準備が整ってから、2 か月後の 5 月 21 日に渡航するまでは目の回るような忙しさでした。2012 年 5 月 21 日は日本各地で日食が観測された日だったのですが、飛行機が 6 時半発だったので日食開始に間に合わず、悔しい思いをしたのを覚えています。

ダブリンに着いてまもなく、オニール先生と今後の方針を決めるための面談がありました。博士課程を出てすぐ、2011 年にトリニティの講師に就任なさったオニール先生は私とほとんど年が変わらないほどお若い方なのですが、遠くないご自身の院生経験に鑑みてか、とても親身になって細々と気を配ってくださるのがとても印象的でした。たとえば、「院生には、放っておかれないタイプと、まめに指導教官にアドバイスをもらいたいタイプと 2

⁵ <https://www.tcd.ie/history/staff/coneill.php> [accessed 13/04/2016]

⁶ http://www.jasso.go.jp/ryugaku/tantoshu/study_a/long_term_h/ [accessed 13/04/2016]

通りいと思うけど、マイはどちらがいい？」などと尋ねてくださり、できるだけアドバイスを伺いたいですと私が答えると、「それじゃ、隔週で面談をすることにしようか」などと、今後の指導方針とスケジュールを細かく決めてくださいました。また、私がお送りしたリサーチプロポーザルの参考文献目録をご覧になった上で、追加して読むべき文献のリストを私に提示してくださいましたので、9月に博士課程に入学するまでの3か月間で、そのリストをもとに先行研究を整理するという明確な課題ができました。

しかし、そうして臨んだ初回の面談では、勉強してきた内容を上手に説明することが全くできず、冷や汗をかくような思いをしました。なによりも自身の英語力の乏しさを痛感したことが、私にとってはとても辛く感じられました。入学にあたって求められる英語の水準をクリアすることと、不便なく専門的な議論ができたり、また友人たちと談笑できたりするような英語力を身に着けることとは、当然ながらまったく次元が異なります。落ち込みましたが、語学力は一朝一夕で身に着くものでもありません。これからできる限りの努力をするのは当然として、うまく話すことができないのであれば、それ以外のところでカバーするしかない、と悲壮な決意をしました。しかし後になって考えれば、語学力の不足は私にとってプラスの方向に働いたところもあります。たとえば課題を出されたら、遅れたときの言い訳もできないので期日通り間に合わせるしかありませんし、また出来が悪かったら困るのは当然自分なので、きちんとしたレベルのものを用意するほかありません。何よりもまず、私はまだ会話能力は拙いけれど、博士号取得候補者(PhD candidate)にふさわしい能力は持っているのだと、書き言葉で示す必要がありました。その対策の一環として、面談の時にはいつも“tutorial sheet”と題したレジメを用意することにしました。これは前述の雪村さんから伝授されたもので、前回の面談から今回の面談までの間に、①読んだもののリスト②面白かったポイント③その中で生じた指導教官への質問④今後のスケジュールを箇条書きでまとめたものです。もともとは口頭での説明に漏れが生じるのを防ぐためのものだったのですが、このレジメは進捗状況の記録にもなると先生方にご好評をいただき、のちに指導学生全員に共有されることとなりました。このように、最初のうちは工夫を重ねながらではありましたが、徐々に面談や英語にも慣れ、それなりに時間はかかったものの、先生たちとも建設的な議論ができるようになっていきました。

続いての大きな課題は、博士論文のテーマ設定でした。私は当初、修士論文の研究課題の延長のつもりで「アイルランド文化復興と政治の関係」を暫定的なテーマとしていましたが、先行研究も多くかなり広大なこのテーマに、適切な切り口を見つけることができていませんでした。先生が文献リストをくださったのは、私の視野を広げるためでもあったのです。トリニティの博士課程では、毎年年度末に Progress review という公式の進捗報告をすることが定められています。これは学生、指導教官、指導教官以外の学内の教員一名、それに研究科主任の四者によって行われる面談で、博士論文提出後に行われる口頭試問(viva)のリハーサルのような意味を持っています。学年度によって必要な提出物は異なるのですが、1年目の Progress review では博士論文の研究テーマに基づく literature review (先行研究のまとめ)と参考文献目録を提出することが義務付けられていたため、遅くともその時期にはテーマを決定していなければなりません。悩みましたが、問題意識の根本をもう一度考え直すうちに、見えてくるものがありました。私の問題意識とは、大きく言えば、

アイルランド近現代史を長く支配してきたナショナリスト史観⁷を相対化したいという思いです。そしてその歴史観のもとで非常に重視されたのが、特に 19 世紀後半から高揚したアイルランド文化復興運動でした。少数言語であるアイルランド語の復興、アイルランド民話・神話を主題とした文学作品の創作、「ゲーリック・スポーツ」と呼ばれるアイルランド独自のスポーツの奨励など、この時期に次々と起こった文化的活動は、のちの独立運動の精神的基盤となったと評価されています。私はもともと、このアイルランド文化復興運動に批判的な意見があったのかどうかにとっても興味がありました。先行研究では、アイルランド文化復興運動が当時のアイルランドを「席卷」したという前提が無批判に共有されてきたという現実があります。私はこの前提をこそ、相対化しなければならないのではないかと考えました。その方法として、私は当時の人々が何を「読んで」いたかに注目してみようと思いました。文化復興運動の主力は文学者たちの活動だったことを考えれば、彼らが発表していた作品がいかに関一般の大衆に「届いていたか」を見るのはよい方法になりうるのではないかと考えたからです。また、アイルランド近現代史の叙述において女性への注目が不足しているとも考えていたため、研究対象としては特に女性の読者に注目することにしました。こうして、苦心惨憺の末ではありましたが、「19～20 世紀転換期アイルランドにおける女性と読書」という、最終的な研究テーマが決定しました。このテーマをもとに *literature review* を書き上げて臨んだ一年目の *Progress review* では概ね高評価を得ることができ、ようやく博士論文のスタートラインに立てたと実感しました。

二年目からはいよいよ本格的な研究に入ることになったのですが、英語で論文を書いたこともない私には、長大な博士論文にどこから着手していいかわかりませんでした。執筆も、ある程度大系的に史料を集め、分析が整ってから書き始める人もいますが、私はとにかく、書けるところから、史料が手に入りやすい部分から書いていこうと決めました。このころ、同期の博士課程学生仲間とライティング・サークルを結成しました。3～4 人でグループを作って、お互いの書いたものをメールで送りあい、その数日後にみんなで集まってフィードバックを出し合うというシステムです。この会では読み手側の負担も考慮して、4000～6000 語くらいを目途に送りあうことになっていました。私はこの会を利用して、とにかく各章の「さわり」となるような部分を書いていくことにしました。学生が組織する勉強会の例に漏れず、残念ながらこの会も長くは続かなかったのですが、本格的に執筆を始めるきっかけとして、また英文を書く習慣づけとして、私には大きな助けになりました。期限までにまとまった分量の文章を書き、締切に間に合うよう逆算して英文校正を依頼し、添削された英文を直してメールで送るといふ、いわば執筆の基礎体力のようなものがこの会で培われたように思います。また、こうして定期的にまとまったものを書いておくと、指導教官との面談の際にもその文章を前もって送っておけば、より建設的な議論が可能となりますし、整理できていないポイントが「うまく言葉にできないところ」として実感されるという意味でも、私にとっては大きな助けとなりました。

さらに、執筆開始と同時に、本格的な史料調査にも着手しました。修士論文の史料はす

⁷ 1922 年に連合王国から独立したアイルランドが政治的に必要とした、イギリス/イングランド支配に対するナショナリズムを主軸に置く歴史観のこと。詳しくは勝田俊輔『「共同体の記憶」と『修正主義の歴史学』—新しいアイルランド史像の構築に向けて』『史学雑誌』107 編 9 号、1998 年 9 月、80-95 頁を参照。

べて Internet Archive で入手した私にとって、実際に図書館や文書館に赴いて史料を探したり、手稿文書を史料として使ったりするのはこれが初めての経験でした。最初のうちは、先行研究で引用されているものや指導教官に勧められたものを主に調査していましたが、ほどなくして自分で当たりをつけてあちこち探し回るようになりました。博士論文レベルになると、史料収集にあたっては、ある種の第六感を働かせるところが多くなっていくように思います。そして嗅覚を研ぎ澄ますには、当然ながらある程度場数を踏まなければなりません。最初の頃は史料を求めて出向いても、実際に見てみると本論ではあまり使えそうもなかったりなど、落胆することもたびたびでした。またそういうとき、史料調査をどこで打ち切るかなど、慣れなければなかなか判断がつかないことも多く、面談の際に思わずオニール先生に愚痴をこぼしたら「歴史家の世界へようこそ(Welcome to historians’ world)！」と冗談めかして言われました。

しかし先生のこの一言は、冗談であると同時に的を射たものでもありました。最初の1年は留学しているといっても先行研究を読んで議論しているだけであり、日本にいたころとほとんど変わらない作業内容をもどかしく思っていたのですが、2年目からは現地で実際に史料を探し、それを集めて分析し、文章にまとめるという作業が始まることによって、ようやく歴史家らしい仕事ができていると実感しました。慣れるまで史料収集は戸惑いの連続でしたが、徐々にコツのようなものがつかめてくると、見つけ出すのにそう時間もかからなくなりました。オンラインカタログなどで所蔵を調べ、司書やアーキビストに連絡を取り、現地で収集するというのが基本的な史料調査の方法ですが、アイルランドの図書館や文書館ではカタログがそこまで完成されていないので、むしろ司書やアーキビストに頼って史料を探すことが重要になります。こういう史料がほしいと特定するだけではなく、私はこういう研究をしていて、こういうことが書いてある史料を探している、と少し抽象的にも話してみるという手段も身につけました。アイルランドはムラ社会的なところがあり、一度人間関係が構築されればそのあとはとてもスムーズにことが運ぶという特徴があります。そのためというわけでもありませんが、司書やアーキビストの方と他愛もない雑談をすることもしばしばでした。すると彼らは本当に、「こんなものもあるよ」「こんなのはどう？」などという史料を見せてくれたり、またお茶や食事まで出してくれたりして、憂鬱だった史料調査は次第に好きな作業へと変わっていきました。2年目の Progress review からは実際の博士論文の1つの章を書き上げることが求められていたのですが、こうして集めた史料をもとに、2年目も無事に課題をクリアすることができました。



写真 1 Veritas 出版社の倉庫で行った史料調査の様子。

さらに、2年目の終わりごろから、徐々に研究会や学会でも発表しはじめるようになりました。私は当初、英語力への自信のなさから、学会発表など考えてもいませんでした。しかし、こちらの友人が積極的に学会に応募しているのを羨ましく思っていましたし、留学中にいつかは、程度には目標としていました。契機となったのは、友人たちが院生の近代史セミナーを組織したことでした。「マイも何か発表してよ」と促され、少しためらいはしたのですが、身内の気軽なセミナーであるということもあり、思い切って挑戦することにしました。こうした発表において、やはり一番恐ろしいのは質疑応答です。とても緊張しましたし、今振り返っても支離滅裂な回答をしたような気がします。みんな友人の最見目もあってか、温かく見守ってくれました。一度経験してしまうと、たいていのことには恐怖心が消えるものです。それからは私も積極的に学会に応募するようになり、この原稿を書いている2016年3月時点までに7回の発表を行っています⁸。

こうして博士課程も3年目に入ったのですが、この頃になると、最終的な提出をいつにするかということを考えなければならなくなってきました。上述のとおり、私はもともと渡航から3年半を目途に博士論文を提出するつもりだったので、2015年12月を提出の目標時期に定めていたのですが、指導教官たちからは、きちんと時間をかけて書いた方がいいと説得されていました。先の見えない状況ではありましたが、指導教官を納得させるた

⁸ 詳しい学会名、発表内容などについてはこちらを参照。 <http://researchmap.jp/maiyatani/> [accessed 13/04/2016]

めにも、とにかく早く初稿を仕上げなければと思いました。博士課程のガイドブックを見ると、初稿は提出の4か月前までには仕上げるようにとの努力目標が書いてあります⁹。そこから逆算して、8月中には初稿を仕上げられるようにしようと目標を定めました。達成に向けて、章ごとに残りの語数を考え、それを日数で換算し、あとはひたすらそのノルマをこなしていくという泥臭い方法を取りました。最初に目標を設定した時は絶対に無理だろうと思えましたし、1日500語も書けずに苦しんだ時もあったのですが、それでも毎日取り組んでいるうちに慣れ、最大で1日2000語ほどは書けるようになりました。その結果、予定よりずいぶん早く、7月初旬には初稿となる原稿が仕上がりました。質より量を優先する私の執筆方法はずいぶん乱暴だったようにも思いますが、推敲に時間をかけられる分、少なくとも自分の性分には合っていたように思います。

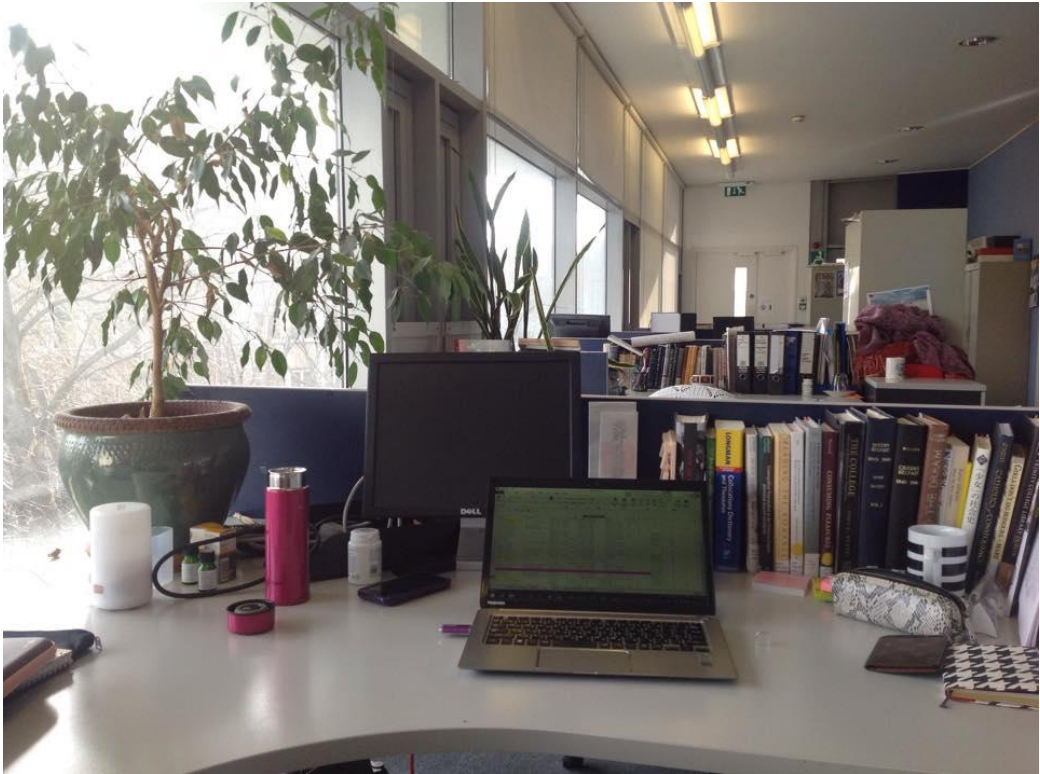


写真 2 院生室。文系学部が入っている建物の6階なので、関係者には「6階」で通じる。

また、JASSOの奨学金は2015年9月で受給を終了することになっていたもので、2015年3月頃からはそれに代わる奨学金探しも併せて行わなければなりませんでした。奨学金の多くが「これから留学を始める学生」を対象としているため、すでに留学している状態で応募できる奨学金はほとんどありません。本命と考えていたアイルランド政府奨学金は、ブラジルや中国などを含む新興国5か国からの学生のみを対象とするものへと数年前から

⁹ 2015～16年度分のものについては、こちらを参照。先述の Progress review をはじめ、博士課程の研究についてのあらゆることが記載されている。 https://histories-humanities.tcd.ie/assets/pdf/post_graduate/PGRResearchHB2015_16.pdf [accessed 13/04/2016]

方針を変更してしまったことがわかりました。そうなるといよいよ残された可能性は1つしかなくなるのですが、その奨学金はかなり競争率が高いことで知られています¹⁰。途方に暮れていたところへ、トリニティ独自の奨学金で、院生を対象とする **Postgraduate Research Studentships** というものがあることを知りました。この奨学生として採用されれば、学費が免除されるほか、年間 6500 ユーロの生活費も支給されます¹¹。私は指導教官とも相談したうえで、この奨学金に応募してみることにしました。通常、奨学金の応募のためには多くの書類を提出しなければなりません、この奨学金の審査は毎年の **Progress review** が基準になるため、応募に際して簡単なフォームを1枚書けば良いだけであるというのも助かりました。最初の審査では残念ながら不合格になったものの、歴史学部では補欠リストのトップにいるというメールを受け取ったのが応募の1ヶ月後で、そのさらに1ヶ月後の8月、繰り上げ合格が決まったという通知を受けました。これでようやく4年目の学費と生活費をまかなえる見通しがたち、最終的な提出時期を2016年8月か9月に延ばすことが可能になりました。こうした奨学金はどの大学にもあるわけではないようなので、私自身はかなり幸運だったとしか言いようがありません。これはあまり留意されていないようですが、最初の奨学金の支給期間が終わった後の滞在費や学費をどのようにするかということは、なんとなく考えておいた方がよいかと思います。

先述の通り、私は初稿になるようなものは3年目に書き上げていたので、4年目はこれを推敲することが主な作業となります。ただ、曲がりなりにもまとまった分量は書けていると思うと精神的にも余裕ができ、4年目の前半は投稿論文となるものも数編書くことができました。特に、英文雑誌に投稿する論文を書くことは留学における私の大きな目標でもあったので、それを考えても、やはり初稿を早い段階で仕上げておくことは正解だったと思います。

この原稿を執筆している今が2016年3月なので、4年目も残すところあと半年です。相変わらず推敲をしている段階ですが、論文の前半部分には大工事を提案されているところもあり、完成した博士論文がどのような形になるのか、今の時点でまだまだわかりません。ただ、それこそがこのような大きな課題に取り組む醍醐味であるとも思われるので、頭を抱えることも多いながら、毎日楽しみにがんばっています。

3. 留学生活

この留学体験記のお話をいただいた時から、私はぜひとも、研究生活に終始した内容ではなくて留学生活をできるだけ生き生きと伝えられるものを書こうと思っていました。この最後の節は、研究とは直接関係しないことについて書きたいと思います。

私はこれまでにホームステイや交換留学などを体験したことがなく、今回の留学は初めての海外生活でしたから、できるだけこちらの学生らしい生活も楽しみたいと思っていました。その手段として、サークルに参加することにしました。こちらのサークル活動はいわば安価で楽しめる習い事のような要素が強く、社会人や院生も多く参加しているため、入会にあたってハードルはそれほど高くありませんでした。4年間を通していくつかのサ

¹⁰ 本庄国際奨学財団による、「海外留学日本人大学院生奨学金」。例年2月～4月末に応募を受け付けている。<http://hisf.or.jp/sch-j/abroadabroad.html> [accessed 13/04/2016]

¹¹ https://www.tcd.ie/Graduate_Studies/prospectivestudents/awards/studentships/ [accessed 13/04/2016]

ークルに参加しましたが、中でも楽しかったのはスカッシュとライフルです。どちらも、日本ではなかなか始めにくいものをやってみたくて選んだのですが、研究の良い気分転換になりました。

さらに、2013年度と2015年度の2回、ティーチング・アシスタント(TA)として授業を受け持つことができたのは、私にとって何物にも代えがたい経験となりました。こちらの授業は、大人数の講義とチュートリアル・セッションと呼ばれるゼミ形式の少人数授業の2種類を1セットとして構成されます。TAが受け持つのはこのチュートリアル・セッションの方で、博士課程2年目以降の学生はTAに応募することを推奨されるのですが、私は当初、これも英語力への自信のなさから、応募をためらっていました。しかし周りの友人たちは当たり前のように応募していますし、1人で考えていても埒が明かないと指導教官に相談したところ、“I can’t see why you shouldn’t go for it - the varieties of accents etc will be a test, certainly, but testing ourselves is what we’re here for! (なぜ応募しないのかわからないよ、いろいろな英語の発音の違いなんかはそりゃあ難しいだろうけど、でも僕たちは挑戦するためにここにいるはずだよ!)”という激励とともに、ぜひ応募するといいと助言してくれました。この「挑戦するためにここにいる」という言葉は、留学中に指導教官たちからかけられた言葉の中でも、とりわけ大切に思っているもののひとつです。この助言に勇気を得て、私はTAに応募し、無事に採用されました。

2013年には「1850年以降のブリテン(Britain since 1850)」という授業を担当し、チャーティスト運動、婦人参政権運動、ファシズム、脱植民地化についてそれぞれ議論しました。議論の形式はその時々によって工夫しましたが、特にやってよかったと思うのは婦人参政権運動の回で試したロールプレイングです。セッションの学生を3グループに分け、それぞれサフラジスト(suffragist)、サフラジェット(suffragette)、婦人参政権に反対する人々の役割を割り当て、「日本から来た視察団の1人」である私のために公聴会を開いたと仮定して、「当時の人々になったつもりで」議論してみて、と促しました。私としては、現代の価値観から歴史的な事象を判断(judge)せず、帰結が見えない状況で、どのようなことが議論されたのかを当時の人々の目線に立って考えるという、歴史学の基本的な態度を体験してもらおうという目論見でした。お調子者の男子学生などは「はるばる日本から我々の国にいらしたミス・ヤタニを心から歓迎します」などと開会の辞まで述べてくれたり、保守派役を演じる学生たちは言葉づかいも上流階級のそれを模してくれたりなど、この方法は大好評でした。そのあと校内ですれ違ふと“Tutorial was fun! (チュートリアル楽しかった!)”などと声をかけてくれる学生もおり、すべてのチュートリアルを終えた後には、授業の担当教官であったオニール先生から「マイは素晴らしいチューターだったと学生から評判だったよ」と直々に労ってもらえたりなど、確かな手ごたえを感じることができました。

2015年度に受け持ったのは「アイルランドと合同(Ireland and the Union)」という授業で、1801年のアイルランド合同から現代までの近現代アイルランド史を扱う、歴史学部の目玉と言える大きな授業のチュートリアルでした。まさかアイルランド史をアイルランド人に教える日が来るとは思わなかったのですが、アイルランド人学生以外にも、交換留学でアイルランドに来ている外国人学生も多く、アイルランド史がある学生にとっては自国史であり、またある学生にとっては自国史でないという状況をどのように取り扱えばよいか、またしても悩むこととなりました。しかしよく考えてみれば、アイルランド史にある程度

の普遍性を持たせるのは、日本人アイルランド史家としての私自身が今までとってきた態度であるはずです。私はこのチュートリアル・セッションの全体を通して、特に記念(commemoration)と歴史叙述(historiography)の2点に注目することにしました。これならアイルランド史に限らず、ほかの国の例に敷衍しても議論することができますし、当然ながら私も日本史の例を挙げて議論に加わることができます。さらに、たとえば「フランスでナポレオンはどのように評価されている？」などと、議論への参加に消極的になっている留学生たちに発言を促すこともできます。2年前に同じ仕事をしたとは思えないほど今回も試行錯誤の連続でしたが、幸い、今回も好評のうちにチュートリアルを終えることができました。



写真3 「アイルランドと合同」チュートリアルの最終セッション（右端が筆者）

さらに、現地にいたことが幸いして、様々な歴史的瞬間を目撃することもできました。特に印象に残っているもののひとつは、2015年に行われた同性婚の可否を決める国民投票です。保守的なカトリック国であるアイルランドは、一方で若者の多い国でもあり、またLGBTと総称される性的マイノリティの人々にも比較的寛容であるという二面性を持っています。ジェンダー史も研究対象にしている者としてこの動きは見逃すことができず、公開討論などに足を運びました。同性婚反対派が「自然の摂理」を、賛成派は「愛」をそれぞれ拠り所にした討論はほぼ噛み合っておらず、国民投票では賛成の圧倒的多数という結果が出たものの、本当の意味での多様性を実現するためには、まだまだ課題は多いのだろうと感じました。

さらに、まさにこの原稿を書いている今行われている、イースター蜂起100周年の様々な記念イベントを目撃できたのは、アイルランド近現代史を専攻する人間としてとても幸

いなことでした。先述した通り、特に1960年代以降のアイランド近現代史はナショナリスト史観の克服を至上命題としてきました。これを「修正主義論争」と言うのですが、修正主義論争以降にアイランド史を学ぶものとして、私自身もアイランド史を一国史観的にとらえないよう、またナショナリスト的価値観からは距離を置くよう、細心の注意を払って研究してきました。そのような態度が、一般人はともかく歴史家の間では共有されていると信じてきた私にとって、無邪気に100周年記念と題して様々なイベントが行われている現象は、かなり困惑もすれば反発も覚えるものでした。しかし、そうは言っても実際に目撃してみなければなんとも評価できません。そういうわけで今は、3月中旬頃から講演会やイベントのラッシュが始まったのをきっかけに、可能な限り多くのイベントに足を運びつつ、また関連のテレビ番組もできるだけチェックするなど、多忙な生活を送っています。現在進行形の印象ではありますが、少なくとも歴史学の専門家による講演では、今まで看過されてきた部分に目を向けること、またできるだけ国際的かつ学際的な視野でこの事件をとらえることが心がけられているような印象を持っています。一方で、たとえば女性史の分野では、女性革命家ばかりを称揚するような態度がいまだに根強く残っているようにも思えました。修正主義論争から現代までの間に、ある問題は克服され、ある問題は未解決のまま残っているということが再確認できた点において、私はこの100周年記念を積極的に評価することができるようになりました。残された未解決な問題に新しい切り口を見つけて克服していくことこそが、私を含むこれからのアイランド史家に求められているのだろうと、決意を新たにしました。

おわりに

19世紀末のイギリス史を勉強したいと思って西洋史学を専攻に選んだ10年前の私に、10年後にはアイランドにいと伝えたらどんな顔をするだろうかと思うことがあります。研究テーマがアイランドになったことも、アイランドに留学することになったことも、今考えてもうまく説明できないような縁とめぐり合わせの連続で、それこそアイランドに伝わる取り替え子の伝説¹²のように、いつの間にここに来たのだろうと狐につままれたような思いに駆られることもしばしばです。しかし最初の計画とは異なることばかりだったこの留学は、思い返してみれば幸運な番狂わせに恵まれた結果でした。

どの世界でも、本場で修業をするということは、いよいよプロフェッショナルとしてデビューする前の最終仕上げの意味を持ちます。しかし自分が留学を経て、「一人前」の歴史家になったという実感を持たかと言え、謙遜でもなんでもなく、まだまだだなど思うことばかりです。ただ私にとって、留学が本格的な“Historians’ world”へ入っていくための大きな道標となったことは間違いありません。今後、この道標を誇らしく振り返ることができるように、残されたあと半年の留学期間、できることはすべてやるつもりで取り組もうと思っています。

¹² 赤ん坊や若い花嫁などを妖精たちがさらっていき、その代わりに醜い妖精の子が残されているという伝説（もしくは取り替えられた子のことを指す）。残された子を暖炉で薪にくべれば、さらわれた子供が還ってくると信じられており、1895年には精神を病んだブリジット・クリアリという新婚の花嫁がその夫によって焼殺される事件も起こった。Angela Burke, *The Burning of Bridget Cleary: A True Story*, London, 2001.